

のことは今回の調査だけの結論として考慮されねばならないことである。

今後更に調査研究して種の見見、種数、量、発生時期、産卵の地、水棲動物との関係等を追求し以つて地球水産界の発展に寄与したい。

所 感

限られた人員、限られた日数、限られた設備等をフルに動員して一応予期通りの調査をなした積りであるが、更に感をいえばPlankton研究第一の必要具とする高倍率顕微鏡と解剖顕微鏡が欲しかった。現在あるところの顕微鏡は旧式な上倍率がとても低い。これではとうていMicroplanktonの調査はできない。従つて今回の調査にもMicroplanktonは殆ど発見されなかつた。標餌料のミズスマシ、エビ、カニ類を生及び各種魚類の餌料となるMicroplanktonの調査研究は是非必要なのである。

先述の通り今回は初試みなので種の検索に重点をおき種の算定、定量を行なわなかつた。

今後は算定、定量は云うに及ばず設点毎の季節的変動、水棲生物、特に魚類との関係を追求してみたい。

参 考 文 献

小 久 保 清 治	浮遊生物分類学
ノ	浮遊生物実験法
北 島 貞	日本動物図鑑
日 中 茂 雄	有用魚類千種

名取川に生棲するシレナシジミ資源量調査

調査員 久高喜八郎、宮城正博、嶋山龍一

は し が き

現在貝類は殆ど日本より空輸してくるので値段が非常に高く一般消費者にまで行き渡らない。当増殖部としては琉球にある貝で味が良く、大量に採取できる貝を探していたが本年三月に西表のアイラ川より発見してきた。これがシレナシジミ(*Geloina lucuana*, Pilsbry)であるが、マングローブの下に生棲しており、その後の研究により食用としての価値だけでなく殻は真珠の核となることがわかつた。そこで将来これが増殖を考えているが、まず現有資源量を推定したいと云い今回は八重山郡垣の名取川を対象にしたわけである。

期 間

1960年6月2日より同月25日の5日間

方 法

名取川に第1図の如く任意の13設点を定めそこに生棲している貝の形、気色、水色、比重、素質、その他について調査した。

貝採捕に当つてはまず面積を測定し、その範囲内を調査員がオマ又はヘラでもつて土をかいたり掘り起したりしてみつけるだけとつた。



一 調査結果

投点	測定日時	気温	水温	比重	底質	調査面積	具深 捕数	1平方メートル 採捕個数	備 考
1	24日10時	31.9	29.8	1.021	至1mmの砂	10×10	0	0	シレンシジメはおらず ホソスジイナガイロ 個採取
2	25日11時5分	28.0	30.0	1.010	#	10×10	0	0	調査時の水深は約5cm 干満時は水深10cm程度
3	23日10時30分	31.4	29.0	1.013	至1mmの砂 白礫あり	10×10	0	0	名取川本流所々に岩盤あり、 河土手はマングローブ林、 具は1個も見当らなかつた
4	26日11時	31.2	28.2	1.004	#	10×10	0	0	川口1.3米、最深1.5米、 所々に僅1mの岩盤あり 砂は少々赤味を帯び
5	25日12時	31.6	32.0	1.014	細砂 3 : 腐泥土 7	20×10	25	0125	1.5×0.5のマングローブ 林が周囲にあり、その空 地で具採取をした。
6	21日12時	30.0	29.2	0.910	細砂 7 : 腐泥土 3	20×20	46	0116	マングローブ林(約広 20m)の奥路にて採取 マングローブ林の中には 具は見当らなかつた。

観点	測定日時	気温	水温	比重	底質	調査面積	貝採捕数	1平方米採捕個数	備考
7	21日14時	31.0	29.6	1.011	径1mmの砂	10×20	0	0	砂地で全魚貝はなくマンドローブもなかった
8	25日13時30分	31.0	29.0	1.011	細砂3 : 腐泥土7	10×10	4	0.40	マンドローブが生えて所々に岩があり、死マンドの枝が多く歩行困難であった。
9	21日15時	31.0	29.7	1.011	径1mmの砂	10×10	0	0	マンドローブ(一年生)が僅かあり、殆んど砂地帯
10	23日13時	31.1	28.8	1.012	細砂7 : 腐泥土3	20×10	5	0.25	マンドローブ林のあきまで干潮時にも水の流れる所は藻類があつた
11	24日11時30分	31.4	30.2	1.016	細砂3 腐泥土7	40×30	108	0.99	貝と貝が多かつた。マンドローブ林の中にも生種
12	24日14時	31.2	30.5	1.000	砂利2 腐泥土7	50×50	4	0.01	生種だめといつてもいゝ結果なかつた
13	24日14時30分	31.0	29.5	1.015	砂利3 細砂5 腐泥土2	50×50	5	0.05	所々に岩盤あり、田雨よりの支流の水温24.2、比重0.993
14	23日11時20分	31.0	27.0	1.013	細砂4 腐泥土6	70×50	25	0.07	マンドローブが密生し貝は小型のものばかり、タマリ水の水温を測つた
15	24日14時10分	31.2	29.0	1.015	細砂3 腐泥土7	5×5	25	0.60	マンドローブがこの区域に8本生じていた(一年生で長さ30cm程度)
16	23日14時	32.0	28.8	1.025	細砂3 腐泥土7	60×60	66	0.15	マンドローブがかなりある砂地で最大の貝を見つけた。水温29.9の所にも生種していた。
17	23日14時30分	32.0	29.8	1.012	径1mmの砂	10×10	0	0	砂地帯
18	23日14時	31.2	27.2	1.014	砂利2 腐泥土8	25×20	3	0.06	人の歩いた跡が多かつた一つの支筋をなし両側は人の入れないマンドローブ林
19	22日14時25分	31.0	35.0	1.014	細砂2 腐泥土3	25×20	231	0.46	これはマンドローブ密生地帯で調査できなかつた
20	22日14時30分	31.0	37.0	1.014	細砂7 腐泥土3	25×10	125	0.50	21×5cmはマンドローブなし干潮時に水はわずかにたまる程度
21	22日13時30分	31.0	32.0	1.015	径1mmの砂	10×10	0	0	ダイウツガサメ(1斤程度)採捕
22	22日14時	31.0	32.0	1.015	径1mmの砂	10×10	0	0	ホソスジイナミガイ2個採捕
23	22日11時	31.0	30.0	1.012	径1mmの砂	20×20	0	0	イラの稚魚、フグがみられた。

調査総面積	15975㎡
具採捕個数	660個
平方当りの平均採捕個数	0.041
平方当りの最大採捕個数	0.00

結 論

以上の調査により次のことが判明した。

名取川を低質の点から考察してみると径1:9の砂地帯と腐泥土、細砂(0.5:1)混合地帯の二つに大きく区分される。即ち前者は1, 3, 5, 4, 9, 17, 21, 22, 23の設点を含み、後者は8, 6, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 18, 19, 20の設点を含む。名取川全区に示した通りである。

砂地帯と腐泥土、細砂混合地帯の水温、比重を比較してみると下表の如くなる。

地帯	水 温(℃)			比 重		
	最高	最低	平均	最高	最低	平均
砂	32.0	28.2	30.0	1.013	1.004	1.012
混 合	38.8	28.8	31.8	1.025	1.010	1.015

混合地帯の方が水温、比重が高い種であるが砂地帯は殆ど流水を測定したのに対し混合地帯は溜水等を測定したが為であつて實質的には変りない。

今回の調査では砂地帯では1個の具も見つからなかつたがその原因は物理的環境条件は前述の通り混合地帯と変りないので性質によるものと思われる。即ちシレンナジミの生棲条件の一つに砂地帯には適してないことを示しているわけである。

次に資源量を推定してみるが先記の通り砂地帯は無生棲地帯と考え腐泥土、細砂混合地帯より割り出してみた。

$$(1) \text{シレンナジミ生棲総面積} \times \text{平方当り平均個数} = 87300 \text{個}$$

$$(2) \quad \quad \quad \times \text{平方当り最大個数} = 147800 \text{個}$$

普通資源量を推定するのに(1)の式を使うが我々の調査では人員及び日数に制限があつたこと、採集器具がヘラヤカマの初歩的なものしか使用できなかったこと及び調査面積が名取川総面積の約1/2000であること等より(2)の式をとつた方がより正しい結果を得る。

但し最少形を重さ4gとしそれ以上の資源量を推定した。よつて名取川に生棲するシレンナジミ資源量を約147800個とする。具の重量平均が9.0gである為これを重さになおすと約1.652屯となる。

所 感

今回は年度末出張で日数にしばられ、西表のタイク川のシレンナジミ資源量を調査する予定を変更して名取川に行つたわけである。

名取川には我々の予想通り具の数は少なく1.65屯と推定した。然し調査員が3名採集具もヤカマ及びヘラしか使えず、上の非定値は推定であつて正確な値と云えないことは勿論のことである。

養殖不能面積は生棲面積の1/3000アールと同面積とみていいが、この中には是も踏み入れられない所があるので今後査量する場合はマシゴロブその他を伏採したり多獲したりする必要ある。

琉球産有毒魚についての予備調査

調査員 大 高 喜 八 郎

は し が き

近時有毒魚による被害が多くなり屢々新聞紙上を賑わすが当所に於てはこの被害を防止する為に各地で有毒魚と云われている魚種に対して二十日ネズミ又は犬を使用して毒性の有無を調べ、有毒の場合はどの部分に含まれているか、通常食料に供する様な調理法を以つて毒はどう変化するか、又その症状はどういつた具合か、出来得ればその対策は何になすべきかを調査研究し、これ等が判明すれば取まとめて「琉球産有毒魚について」というパンフレットを各関係官庁、漁協等に送付したいと思う。そこでまず全琉にはどういつた有毒魚があるか予め知つておく必要があるので全琉の各関係団体より届込み調査をした。

方 法

下記の要領で全琉の漁協に3通、漁連に3通、水産技術員に25通合計64通の調査書を発送した。

調 査 書

一 有毒魚と云われている魚種名について

方言名

和名〔不明の時は方言のみ〕

例 (1) イングサンドルミ

バラムフ

(2)

：

二 症 状

(1) 食した場合口門より油状のものが出る

(2)

：

三 産 法

(1) 今の所なし

(2)

：

四 食 用 法

(1) 干め塩漬すると何ら中毒しない。

(2)

：

五 備 考

(1) 全長約50センチに成り茶褐色で外皮は微少な円鱗と骨性の軟骨で被られてザラザラしている。マブ#延縄にもよくかかり深部軟等の釣り餌となる

(2)

：

結 果

調査書を δ と通発送したところが返送されてきたのは糸波漁協、与那城村水技、屋我地漁協、伊是名村水技、久米島中里村交所、石垣市水技。漁獲八重川交所の僅か七通のみであった。

魚名は殆ど方言名で書かれてあったので筆者の調べ得たものは和名、学名を附した「症状」、「療法」、「食用法」は原文をそのまま記載し「備考」には筆者の考察も入れた。

1【方言名】アカナ、アカナー又はアカナーミイバイ(屋我地)

【和名】オキアノダイ(松原) アカノダルミ(徳山) 又はドクギョ(田中)

【学名】*Lutjanus vaigiensis*(Quoy et Gaimard)

【産地】糸波、平安座、伊平座、伊是名、久米島仲里、石垣島東海岸より黒島御城、与那国

【症状】軽症の場合は熱発し、腹痛、嘔吐、下痢を伴い、手足の間節が痛み出し、冷水に手足を入れると電気に触れた時の様に痺れる。

重症時にはそれに加えて頭暈や眩暈が抜毛する恐れもあり、時には失心したりするが命に別条はない模様である。

【療法】スーヤ(水中根茎を作る木)の葉又は幹を削つたものと黒砂糖を煎じそれを飲むとよいとされているが効めは詳かでない。(糸波、伊是名、屋我地報告)

【食用法】有毒なもの無毒のものがあり生は殆ど食せず塩水で洗済し、蒸乾又は乾燥したり塩漬にしたりして煮て或いは焼いて食べたりするが、有毒のものは殆ど毒性は消えない模様である。

神経痛や性病に罹つた人の間ではわざわざこれを煮て食べ治療した人もあるが悪化したとの例もある。

石垣市では混魚してカマボコに使用すること。

【備考】主に一本釣で漁獲され、久米島では大きさは4-9疋、西表の古見附近では最大20疋、普通は25-3疋程度。

食用にするのは地域的に有毒であるものと無毒のものがある。例えば石垣島西海岸のそれは無毒と云われている、又は胸鰭を鰓孔より入れ口端より出ないものは無毒、肉に縞、銀鱗がつかないものは無毒と云われている為である。是してこれらに科学的な根拠があるかどうかは今後の研究如何にかかっている。

2【方言名】イナナー

【和名】フネダイ

【学名】*Lutjanus y1vulatus*(Ouvier et Valenciennes)

【産地】糸波、伊是名、石垣

【症状】熱発し嘔吐、下痢を伴い、間節が痛む。

【療法】粥に豚肉を大量に入れて食する。スーヤの葉と黒砂糖を煎じて飲む。

【食用法】サンソウの枝葉を上に入れて煮ると毒が抜けると云われて居るが経験したことはない。(伊是名) 必ずしも全部が中毒するということもなく塩漬又は生であけて食する。(糸波)

混魚してカマボコに使用混合割合は1/10程度(石垣)

【備考】和名がフネダイになっているがほとんどにそうか模索の裏がある。フネダイならば側線より上の縦列鱗は全て背方へ向い側線より下方の縦列鱗は水平方向に走る。体に褐色横帯及び同色の縦帯がない、頭に多数の青色斑があり、体側に銀灰色点がある。黒色で縁取られた一乳白色斑が背

暗前部軟条部の下方の背線上にある。鱗は凡そ9-50-18である。

石垣では約24近程度のものが多いとのことである。

3【方言名】アオキマトビー

【和名】ニセクサホシフエダイ(松原) ニセクサホシタルミ(神山)

【学名】*Lutjanus fulviflamma* (Forsk.)

【産地】糸満

【症状】熱発し頭痛、嘔吐、下痢を伴い、手足の関節が痛み出し冷やした手足を入れた場合、電氣に触れた如くジンジンと手足が痺れた様になる。

以上が軽症の場合で重症時にはそれに加えて頭髪や眉毛が抜毛する恐れがあるが切等命に別害はない模様である。

【療法】スーチの幹を削ったものと黒砂糖を煎じた汁を飲むとよいと云われているがその効めは詳かでない。

【食用法】煮るより蒸身にする方が発毒性が少なく更に干魚にして焼いて食すると中毒も緩和するとのことであるがはつきりしたことはわからない。

【備考】頭に青色縞線なく又側線上に白色点がない。そのかわり有鰭軟条部下の突出部がある。眼下域は甚だ巾が狭い、黒斑の大部分は側線より下方に延びている。

4【方言名】カースビ

【産地】糸満

【症状】熱発し頭痛、嘔吐、下痢を伴い手足の関節が痛む。

【療法】スーチの幹を削ったものと黒砂糖を煎じて飲むとよい。

【食用法】煮るより蒸身にする方が発毒性は薄らぐと云われているがはつきりしたことはわからない。

【備考】和名、学名は不明、地方によつて有毒であるものかないものがあるらしくこの種が有毒であるときいていそのは糸満だけである。

5【方言名】アカアール

【産地】糸満

【症状】熱発、嘔吐、下痢を伴い手足の関節が痛む、時に死亡する。

【療法】スーチの幹を削ったものと黒砂糖を煎じて飲むとよい。粥に豚油を大量に入れて食する。

【備考】和名、学名は不明であるがヤジヘメ *Sphaeralus akara* を長崎地方ではアカアールと称している。形態がよく似ているのでひよつとすると沖縄で云われているのと同種かもしれない。

6【方言名】チキルカマサー、又はシキルカマサー

【和名】ドクカマス

【学名】*Sphaeraea picuda* Bloch & Schneileider

【産地】糸満

【症状】熱発、頭痛、嘔吐、下痢、手足の関節炎

【備考】時たま臓器を食した場合に起る。神山義夫博士の「南洋有毒魚類調査報告」にも産地に於て時々中毒する例があるとのことである。

然し胎身は食している様である。

7【方言名】クルーミイバイ

【産地】伊是名

【性状】人に食り種々の症状があるが大抵次の通りである。

目眩、下痢、嘔吐、手足の関節が痛み体がだるく水に触れると針で刺される様に痛む、夜になると体中痒くて眠れない。

【製法】スートの葉と黒砂糖を煮じて飲む、粥に豚脂肉を大匙に入れて食する。患者はカルシウム注射とブドウ糖に鎮心剤を混ぜて注射する。

【食用法】塩漬干にするといふと云われているが生と何れも変りない様である。サンソウの枝葉を上に入れて煮ると毒が抜けると云うが経験がない。

【備考】ハエ科魚類であろうが種別をみないと断定できない。この種の報告は伊是名村一産のみ

4【方言名】ニダヤーイバイ

【産地】伊是名 石垣

【性状】目眩、下痢、嘔吐、手足の関節炎、体がだるく水に触れると針で刺される様に痛む。夜になると体中痒くて眠れない。

【製法】スートの葉と黒砂糖を煮じて飲む、粥に豚脂肉を大匙に入れて食する。

患者はカルシウム注射とブドウ糖に鎮心剤を混ぜて注射する。

【食用法】塩漬干にするといふと云われているが生と何れも変りない様である。サンソウの枝葉を上に入れて煮ると毒が抜けると云う。

【備考】普通大きさの約2cm程度であるが場所により中毒するものとしたいものがある。

普通奥国近海でとれるものはよく中毒すると云われている。

和名をケツネメバとしてあつのがマダラハタ *Epinepheles fuscoguttatus*によく似ている。

5【方言名】ウージンナジ

【産地】伊是名、久米島仲里、石垣

【性状】嘔吐がし、下痢、嘔吐、手足の関節が痛む、視力が減退する。

【製法】スートの葉と黒砂糖を煮じて飲む、粥に豚脂肉を大匙に入れて食する。黒砂糖と蜂蜜を混ぜて飲む。患者はカルシウム注射とブドウ糖に鎮心剤を混ぜて注射する。

【食用法】有毒と無毒のものがあり毒のあるのを煮た場合皮が堅く煮る(石垣)

生は食せず塩水で洗済し乾燥又は乾燥する(久米島仲里村)

塩漬干にするといふと云われているが生と何れも変りない。サンソウの葉を上に入れて煮ると毒が抜けると云うが経験はない。(伊是名)

【備考】伊是名村東田村から漁獲するものは保存を有すると云われ四方沿岸のもの1中毒しないものが多いと云われている。赤黒で円い種類があり大きいものは1.2~1.5cm程もある。(久米島仲里村)
茶褐色で斑点なし約4cm程度、ウツボの種類で多種ある様である。

10【方言名】エーグリア

【和名】アイゴ

【学名】*Biganus fuscescens* (Houttuyn)

【産地】伊是名、西表

【性状】下痢、嘔吐、目眩

【用法】 カルシウム注射で治る

【備考】 アイゴと云えば有棘刺に刺さった場合痛むので有刺で初級辺りでは普通に食し、中毒したとの例を聞かなかった。解毒不良ではなく伊達名村丸志川島西方沿岸から採獲するのは中西であると云われている(伊達名)

西海でも、(平瀬川口に大群に集まつたアイゴを食したところが嘔吐、下痢等の集団中毒を起した例があるとのことである。(西海出身水産高学生)

11【方言名】ヒヂサー

【産地】 岩手県

【症状】 激しい下痢と嘔吐で苦しむ死亡する。

【食用法】 厚つらからうぐ茂をぎ尾を切り各部を割して血を出して食すれば中毒しない。

【備考】 アゴの一種であるが食用法には危険がある。

12【方言名】ネツヒヂ(与那城) シロカニヒンサー(ケラマ)

【和名】 センニンアゴ

【学名】 *Sphaeroides scleratus* (Forster)

【産地】 与那城 ケラマ

【症状】 吐血して死亡

【備考】 1966年実高部某がこれを食べて死亡

13【方言名】ワーニーバイ

【産地】 与那城

【症状】 下痢、嘔吐

【備考】 形態がわからないが多分ハタ科魚類ではなかろうかと思われる。

14【方言名】ンナトスピー

【産地】 久米島仲里

【症状】 車気がし、手足かだるくなり、失心する事がある。

【用法】 注射又は砂糖と味噌をまぜて飲む。

【食用法】 生は食せず塩水でよく洗済し風乾又は乾煎して食する。

【備考】 0.5-1.5%程度で尾の背に黒点がある。

ニヒタコホシタムシ *Lutjanus fulviflamma* ではないかと思われる。

15【方言名】アヲニーバイ

【産地】 石垣

【症状】 嘔吐、下痢、腸胃炎

【食用法】 有刺のものや無刺のものがあり、普通に食用に供する場合もあるが脱皮してカマオロに使用される。

【備考】 ハタ科魚類のアヲ (*Hipposiphus* Guvier et Valenciennes) ではないかと思ふ。重量は約1.2%程度。

16【方言名】アゴヒヨサー

【産地】 石垣

【症状】 嘔吐、下痢、腸胃炎

【食用法】食用に供するものもあるが混食してカマボコに使用される。

【備考】何科か不明である。約30匹の大鰻魚でカマボコに使用する時は混る割合を1/10以下にするとのこと。

14【方言名】センスルー

【和名】ホソナミヘギ

【学名】*Aleuterus scriptus* Osbeck

【産地】石垣

【症状】嘔吐、下痢、関節炎

【食用法】食用には全然供せず。

【備考】豚等に供した場合直ちに死亡する。約1.8匹程度

15【方言名】カチバルコーナー

【産地】石垣

【症状】嘔吐、吐血、死亡する率が高い

【食用法】全食しない。

【備考】フグの一種で約1匹程度

結 論

今回は回答が少なく、糸満、与那城、屋我地、伊是名、久米島仲里、石垣の六地域の有毒魚しかわからずしかも魚種が少なく形態、和名、学名等も不明のものが多い為或いは重複しているものがあるかもしれない回答されてきたものは全てたべて中毒するいわゆる食毒魚であるが、有毒魚の中には刺すものも含みこれを刺毒魚という。刺すものには魚の外にナツゲ蟹、イモガイ類、ヒトゲ蟹もある。

報告された18種及びその後回答で聞込んだものについて食毒魚、刺毒魚、その他の有毒水産生物についてまとめてみると次の如くなる。

食 毒 魚

方言名	和 名	学 名	産 地	症 状
アオナ アオナー アウナーミイバイ	オキフニダイ アカダダダニ ノクギヨ	<i>Lutjanus</i> <i>vaigiensis</i>	糸満、平安座、伊 平屋、伊是名、仲 里、石垣東海岸よ り黒島	熱発、嘔吐、下痢、関 節炎、脱毛、失心
イナター	フニダイ	<i>Lutjanus</i> <i>rivulatus</i>	糸満、伊是名、 石垣	熱発、頭痛、嘔吐、下痢 手足の関節炎
アオヤマトビー	ニセタノコフニダイ ニセタノコダイ	<i>Lutjanus</i> <i>fulviflamma</i>	糸満	熱発、頭痛、嘔吐、下痢 関節炎、脱毛
オースビ アオスビ			糸満 宮古	熱発、頭痛、嘔吐、下痢 関節炎
アオアータ			糸満	熱発、頭痛、嘔吐、下痢 関節炎 時に死亡
チキルカマサー シキルカマサー	ドクカマス	<i>Sparus</i> <i>picuda</i>	糸満 宮古	熱発、嘔吐、頭痛、下痢 関節炎

方言名	和名	学名	産地	症状
イルーニイバイ			伊是名	目眩、下痢、嘔吐、関節炎 夜になると痒くて眠れない
ユダヤーニイバイ			伊是名、石垣	目眩、下痢、嘔吐、関節炎、痒痛
ウージンナヂ			伊是名、仲良、石垣	瘧疾を伴い、下痢、嘔吐、関節炎、視力減退
ユードフア	アイゴ	<i>Siganus fuscescens</i>	伊是名、西表	下痢、嘔吐、目眩
ヒヂサー			伊是名	激しい下痢と嘔吐で苦し み死亡する。
ヌブーヒヂ	センロンフダ	<i>Sphaeroides sceleratus</i>	与那城	吐血して死亡
ローニイバイ			与那城	下痢、嘔吐
シナトスビー			仲良	瘧疾がし手足がだるくなり 氣を失う。
アラミーバイ			石垣	嘔吐、下痢、関節炎
アラヒヨサー			石垣	嘔吐、下痢、関節炎
センスルー	ホシナミヘギ	<i>Aleuterus scriptus</i>	石垣	嘔吐、下痢、関節炎
メタバルコーナー			石垣	死亡する率が多い。
ミミヂヤー ウルノハ		<i>Latjanus sp</i>	那覇	熱発、関節炎
アカジン	アカジン	<i>Plectropem- us truncatus</i>	ケラマ、那覇、 宮古	熱発、嘔吐、下痢、 関節炎
チンスアカジン			那覇	熱発、嘔吐、関節炎
イノーアカジン			那覇	熱発、嘔吐、関節炎、 下痢
ナガカマサー	オオカマス	<i>Sphyranta torsteri</i>	夏国	熱発、嘔吐、下痢、 関節炎、神経マヒ
ナガジュア カジン	バラハタ	<i>Variola louti</i>	伊江、那覇	熱発、嘔吐、下痢、 関節炎、痒痛
インダマンドルミ	バラハム	<i>Ruvettus pretiosus</i>	那覇、ケラマ、 石垣	肛門より油状のものが出 る。
ブーナー	サバアタ	<i>Lagocephalus lunaris</i>	那覇、ケラマ、 石垣	嘔吐、口唇、指端の紫了 マヒ、歩行困難、四肢麻 痺、呼吸困難、死亡
オイトエブナー	ユモンフダ	<i>Sphaeroider alaopiumbe- us</i>	那覇、ケラマ、 石垣	
ブーナー	ヨロシマフダ	<i>Tetraodon hispidus</i>	那覇、ケラマ、 石垣	

なお食魚毒の治療としては各地とも似かよっているのをまとめてみた。

1. スーナ(水中眼鏡を作る木)の葉又は幹を削つたものと黒砂糖を煎じて飲む。
2. 柄に豚肉を大量に入れて食する。(多分下痢代用としてであろう。)
3. エルシウム、ブドウ糖、強心素の注射をする。
4. 黒砂糖と味噌をまぜて飲む。(毒強しといつて居る)

刺 青 魚

方言名	和名	学名	産地	症 状
イニグワア	アイゴ	<i>Siganus fuscescens</i>	全 産	背鰭棘にさされると激しい疼痛を感じる。しかし大したことではない。
カーニー			全 産	同 上
イノヘニユ	ミノカサゴ	<i>Pterois lunulata</i>	#	背鰭棘にさされると激しい疼痛を感じる。失心する人もある。
アーフア	オニオコメ	<i>Inimicus japonicus</i>	#	背鰭棘にさされると激しい疼痛をうけ真黒にはれぬがる。
アーフア	オニダルマオコゼ	<i>Synanceia verrucosa</i>	#	背鰭棘にさされると皮下の毒腺より毒液が送られ激しい疼痛をうけ死ぬ時もある。
ターガイユ ターガイユ	ゴシズイ	<i>Plotosus anguillaris</i>	#	胸鰭棘に刺されると激しい疼痛をうける。
カマンタ	エイ	<i>Dasyatis akajoi</i>		尾部の棘に刺されると激しい疼痛を感じ失心する人もあるとのこと

刺 青 の 治 療

刺青を受けた時の治療方法には色々ある。南洋の住民は刺されると直ちに患部を切開して洗滌するという一説療法としては局部に石炭酸を注射する方法や、アンモニア水で拭く方法等が行われている。

或る人はトビエノの刺青を受けて死ぬ様な苦痛を味わったが濃いアナルマリン溶液を注射したところ、直ちに痛みが止り、傷も早く治つたそうである。ニバス博士は過マンガン酸加鼠の濃厚液を数滴傷口へ注射すると苦痛は止み、傷口もすぐ治ると稱している。

伊長石村水産技術員末古洋泉氏が刺青に毒を有する魚に刺された場合の治療法を三名に経験した方法を記す。

右手を刺されたら右手の親指、左手を刺されたら左手の中指。(足の場合も同様)の第一関節外側部の真後中央部一ヶ所にお灸をすえる。その場合一灸で痛みが止らない場合はその附近を少々位置をかえてみると四、五灸では大体痛みが止む。

そ の 他 の 有 毒 水 産 物

方言名	和名	学名	産地	症 状 其 の 他
イーラー	アオクラゲ	<i>Dactylometra pacifica</i>	全 産	触手に触れると発赤し火に燒かれる様な痛みを感じる。時に痙攣を起す人がいる。
イイチニグワア	カブツノエボシ	<i>Physalia physalis</i>	#	

方言名	和名	学名	産地	症状その他
イーラー	アンドンクラゲ	<i>Charybdea rastonii</i>	全 琉	
シナグワア	アソボイナ	<i>Gastriidum geographus</i>	#	
シナグワア	シロアソボイナ	<i>Gastriidum (Turiparia) tulipa</i>	#	
シナグワア	ニシキミナン	<i>Dendroconus striatus</i>	#	
シナグワア	アボイモ	<i>Darioconus (Regiconus) sulcus</i>	#	
シナグワア	イガヤサンミナン	<i>Darioconus textile</i>	#	
トーガチナヤー チミトガチナヤー	オニヒトデ	<i>Acanthaster planci</i>	#	
ガチナヤー	ダンガヒ	<i>Didema setosum</i>	#	

所 感

有毒魚と一言に言つてもなかなか難かしい。地域による違いがある為である。漁師はこの地域差を毒ガニ
或は毒草を食する為であるといつているが、突つこんで聞くと毒ガニ、毒草というものが確然としてくる。
今の所学界でもその原因を追求中であるがはつきりしたことはわからない。

調査書を出したところが伊江漁港から早速乱地で有毒魚だと云われているヒンガナーガジューアカシシ(バ
タヘタ, *Variola louti*)を寄贈して戴いた。そこで筋肉、肝臓、消化管、心臓、肝臓の各部に分け
これらを生、煮、油あげ、塩漬の各調理法でもつて二十日ネズミを使つて実験したところが何らの変化も
みられたかつた。ネズミが喰つて大丈夫だから我々人間でも大丈夫だろうと武食したところが何ら異常は
起らなかつた。この様に中毒魚として取り扱われているものが、そうでなかつたりする。この魚は時期的な
相違か、大きさによるものか、産地の違いによつて有毒か無毒かまだ判然としないが研究すればするほど興
味がわく。

一志これで確率にほどういつた有毒魚があるかといつたことがわかつたが今回は回答が少なく甚だ残念であ
つた。特に宮古と大東から報告がこないのは淋しい。今からでも遅くはないから回答してもらいたいもので
ある。なお今後は実験に参りたいので各地で有毒魚が獲れた場合連絡して戴きたい。

参 考 文 献

- | | | | |
|----------|---------------|----------|----------|
| 植山 義夫 著 | 南洋有毒魚類調査報告 | 松原 善代松 著 | 魚の突つた習性 |
| 松原 善代松 # | 魚類の形態と発生 | | (水産調査) |
| 北 隆 雄 # | 原色動物図鑑(水棲動物類) | 福原 純治 # | 原色日本魚類図鑑 |
| 田中 茂穂 # | 日本魚類図鑑 | | |
| | 有目魚類一千種 | | |